

研究ノート

古墳時代の女性像と首長

―栃木県下野市甲塚古墳の埴輪をもとにして―

日高

慎

## 古墳時代の女性像と首長

― 栃木県下野市甲塚古墳の埴輪をもとにして ―

はじめに

形象埴輪は古墳時代の代表的な物質資料である。特に五世紀中ごろから作られるようになった人物や動物の埴輪は、その意味するところについて様ざまな議論がなされてきた(日高一〇・一三 b・二〇一五)。人物埴輪等の意義を考える上で極めて重要なことは、以下のような事柄である。すなわち、生前の場面なのか、それとも死後の場面なのか、あるいは生から死へと移行しようとする場面なのかという点で意見の相違があり、多くの見解が出されている。また、人物埴輪のなかに首長像と目される造形があることは多くの研究者の一致をみているところであるが、それが被葬者像なのか、それとも新たな首長像なのか、はたまたまったく別の存在なのか、という点で意見の相違がある。

しかしながら、見解の相違を乗り越えていかなければ、

形象埴輪の意味するところを理解することはできないだろう。これらの中で、最も妥当な見解を見出す必要がある。

そこで本稿では、近年明らかになった栃木県下野市甲塚古墳の埴輪群像をもとにして、上記の見解の相違に対して筆者の思うところを述べていきたい。さらに、古墳時代の女性像と首長について再検討を試みる。まずは、形象埴輪群像に対する諸見解を紐解くところから始めてみよう。

## 一 埴輪群像の意味についての諸説

これまで、先学によって提出された埴輪群像の意味についての諸見解は、以下の通りである。

- ①首長権(霊)継承儀礼(水野正好一九七一・一九九〇、橋本博文一九八〇・一九九三、須藤宏一九九一など)  
 ②殯・殯宮儀礼(和歌森太郎一九五八、若松良一九八六)

・一九九二、市毛勲一九八五、橋本博文一九八〇、森田

克行二〇一一)

③葬列(後藤守一九三三・一九三七、滝口宏一九六三、

市毛勲一九八五)

④生前顕彰(杉山晋作一九八六・一九九一、和田萃一九九三)

⑤供養・墓前祭祀(高橋克壽一九九六・車崎正彦一九九九

・梅沢重昭一九九八)

⑥他界における王権祭儀(辰巳和弘一九九〇・一九九二・

九九六)

⑦集落や居館での祭祀・墓前祭祀・生前の儀礼(坂靖二〇

〇〇)

⑧神饗儀礼(小林行雄一九四四・一九六〇・一九七四、森田

俤一九九五、日高慎二〇一五)

⑨殉死の代用から来世生活(増田美子一九九六)

⑩古墳の被葬者に服属して奉仕にあたる近侍集団(塚田良

道二〇〇七)

これらの諸見解について、それぞれ何時の場面と理解し

ているのかという観点で分けてみると、以下のようになる。

・生前の場面：①⑦⑧

・死後の場面：①③⑤⑥⑦⑨⑩

・生から死へと移行しようとする場面：②

つまり、多くの研究者が、死後の場面を想定しているこ

とがわかる。すなわち、被葬者が亡くなった後に生者が執

り行う現実の場面①③⑤⑦)、亡くなった被葬者のため

に奉仕する(させる)人びとの場面⑨⑩)、亡くなった

被葬者の為に生者が考えた理想の場面⑤)などである。

人物埴輪を中心とする形象埴輪群像の主要な具体的場面

としては、先字が指摘してきたとおり、飲食ないし歌舞・

音曲である(若松一九九二など)。一部の例外はあるもの

で、中小古墳から大規模古墳まで、その多くで共通しているの

が、飲食物等を捧げ持つ人物(女性が多い)とそれを受け

取る中心人物(男女両方の可能性がある)である。また、

形象埴輪群像について、塚田良道は人物埴輪の配置に五つ

の形式があり、それらが墳丘規模などによって欠落したり、

結合したりしていることを明らかにした(塚田二〇〇七)。

つまり、多くの古墳で共通している飲食や歌舞・音曲とい

った人物埴輪群像の場面を、何時のものと考ええるかで研究

者間の相違があり、意味についての多様な解釈が出てくる

という訳である。

筆者は、人物埴輪群像のなかの中心人物について、被葬者

そのものであると考えている(日高二〇一五：六一―七〇

頁)。このことは、前述の埴輪群像の意味に深く関わりと

ころである。死後の場面で生者が執り行う姿と考える説で

は被葬者は登場しないのだから、明らかに首長と目され

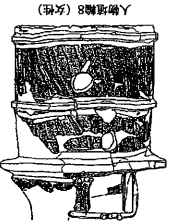
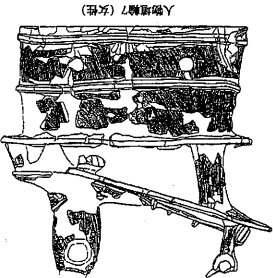
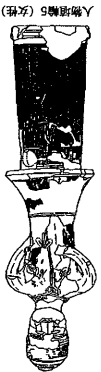
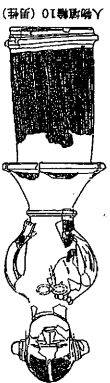


図 1 人物植輪の配列

0 50cm

る人物像があることは事実であり、それを次代の首長など

と解釈するのだろうか。しかしながら、埴輪作りという面に

着目すると、生前に発注されていた可能性が極めて高いと

筆者は考えている。形家埴輪にみられる共通表現の存在は、

埴輪の作り置きを示しており、死後発注されたものではな

さそうである(日高一〇一三b)。そうすると、被葬者の

生前に発注されているのだから、表現されるのは生前の場

面と考えるのが素直な解釈であると思われる。

筆者が考える埴輪群像の意味は、被葬者が生前執り行っ

た神宴饗礼を中心とする場面なので(日高一〇一五 二三

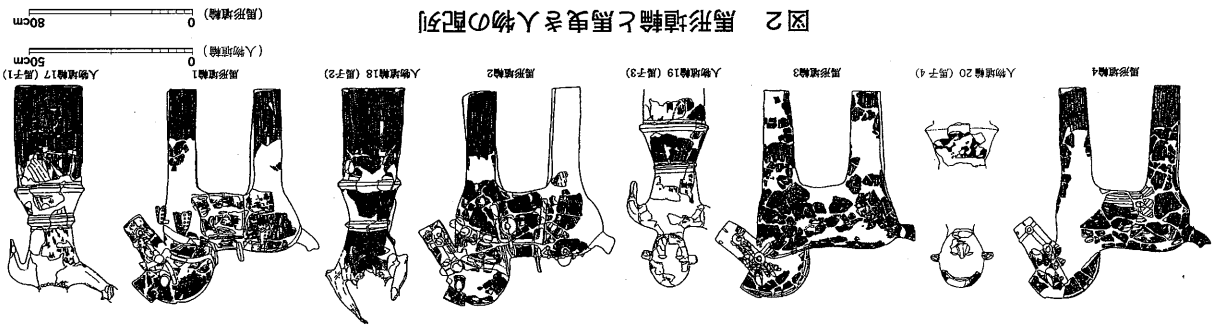
―三二頁)、当然ながら被葬者が生前の姿として登場する。

そのように考えると、首長墓とは考えにくい小規模古墳に

おける人物埴輪に対しても理解しやすい。すなわち、それ

ぞれの被葬者の生前の活動を反映した姿として表現したと

図2 瀬田遺跡で調査された入葬の埴輪



考えるのである(日高前掲 六一―七〇頁)。

## 二 甲塚古墳の埴輪群像

本稿で取りあげる栃木県下野市甲塚古墳の埴輪について

解説している。甲塚古墳は、径八〇メートルの円形基壇

の上に主軸長四七メートルの前方後円形埴丘があるという、

特異な形状をなす六世紀末頃の首長墓と考えられる古墳で

ある(下野市教育委員会二〇一四)。横穴式石室西側の円

筒埴輪列に挟まれた範囲で一列の形象埴輪列が検出され、

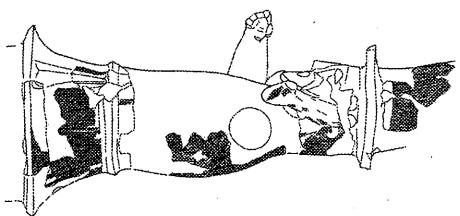
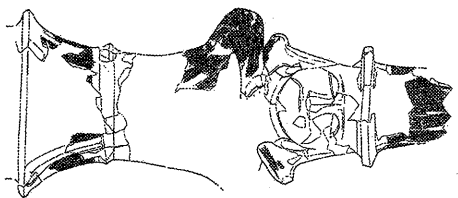
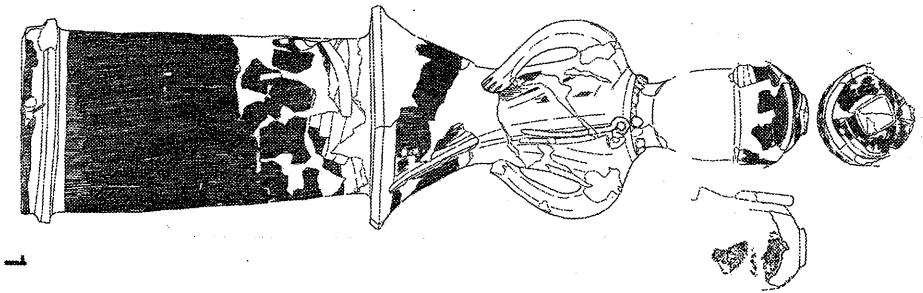
石室に近い場所に男性七体、そして女性九体(図1)、最

も遠いところに馬四体と馬曳き男性四体のセット(図2)

が立てられていた。女性列中の最も石室に近い位置に機織

形埴輪二体およびそれに付従するような女性像一体があり、

形状の異なる機織り機が表現されていた。機織り機は、新



0 12cm

2

图3 人物6 (女性) 与人物16 (男性)

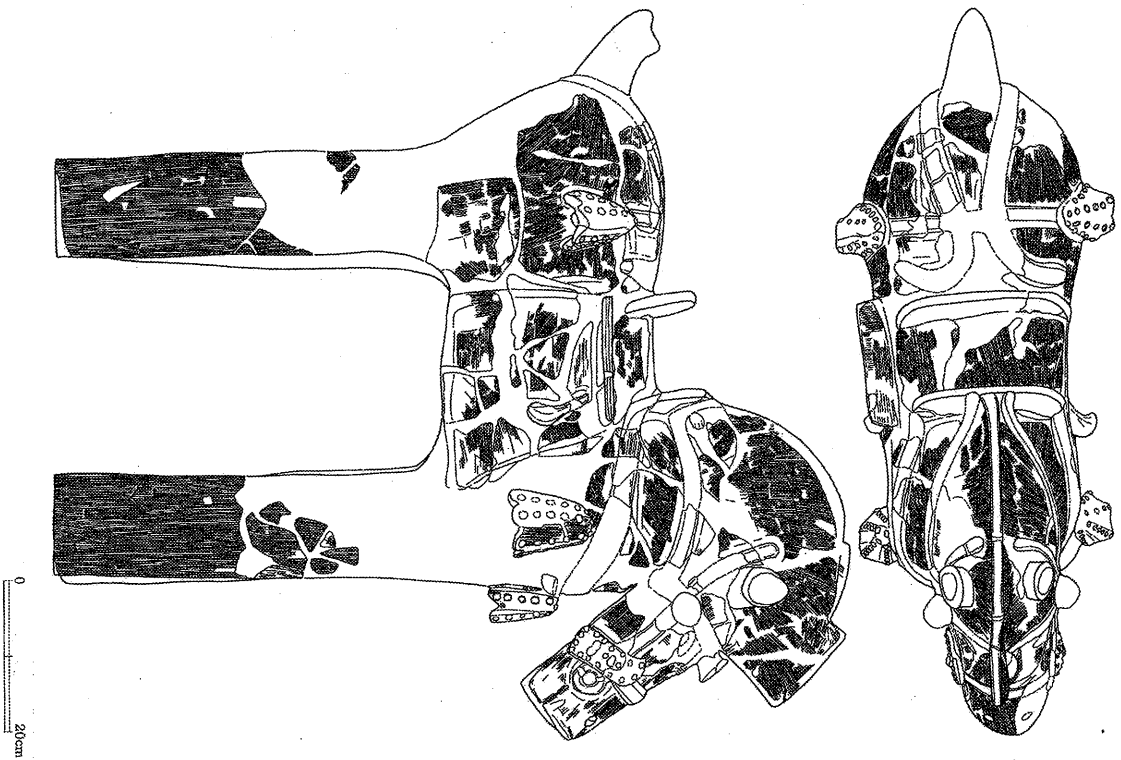
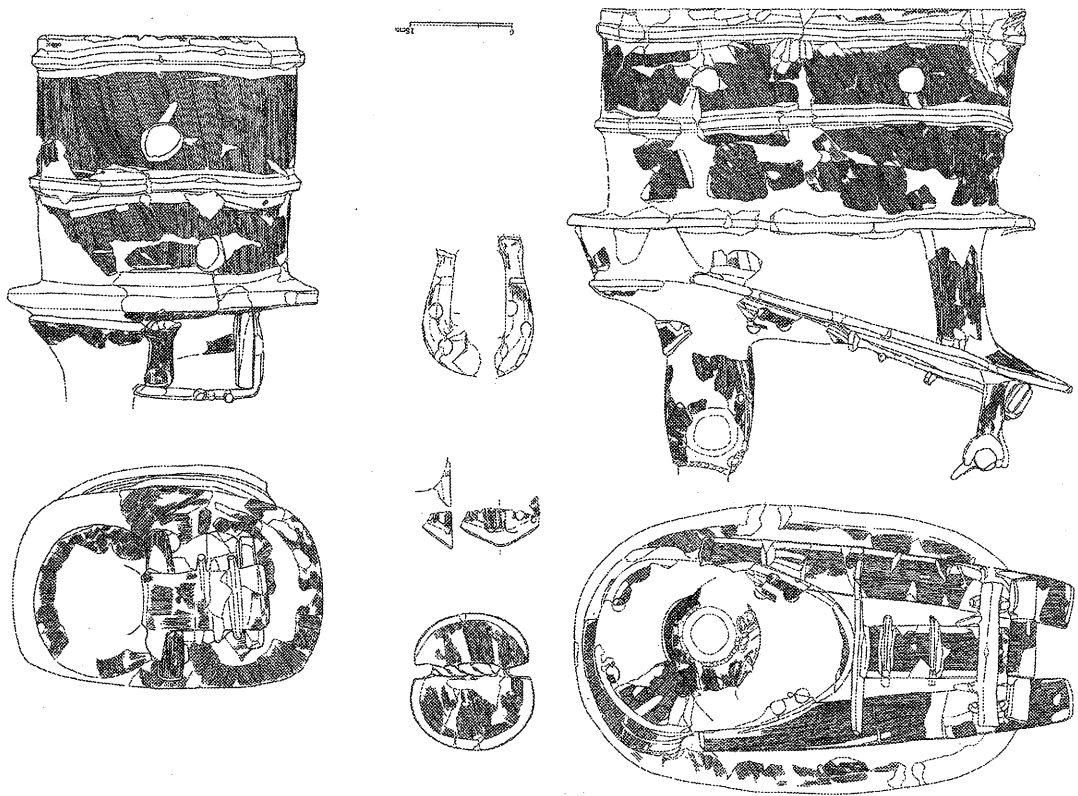


図4 馬1の馬装 (横坐り馬)

图5 人物7·8 (机械形直輪)





旧の道具をことさらに作り分けていたと考えられる。男女それぞれの埴輪は、横穴式石室に近い方が背も高く、服装も袴を立体的に表現しているなど総体的に上位の存在と理解してよい。男性では下げ美豆良を表現した人物埴輪一六、女性では人物埴輪六、馬形埴輪一が該当する。女性の機織り形埴輪二体（人物埴輪七・八）およびそれに付従う女性（人物埴輪九）は、人物埴輪六と比べるとやや小振りであり、人物埴輪九は服装表現もやや簡素であることが特徴といえる。これらの埴輪群像の中で、筆者が全体の中心人物と考えているのが、人物埴輪六とした女性像である（図3-1）。女性像のなかでは造形的に最も大きく表現されており、頭飾りや服装表現なども他の女性像にないものがある。さらに、馬一はf字形鏡板付轡・馬鐸・盃鏡という完全装備の飾り馬であるが、右側面に横坐り用の短冊形水平板を着装しており（図4）女性用の馬と考えられる（百高二〇一五）。馬二も飾り馬であるが、環状鏡板付轡・馬鈴・輪鏡という馬装であり、馬一に比べると質素である。馬三は片手綱馬、馬四は頭絡のみの馬である。馬一という女性用の馬が最も上位の存在として甲塚古墳に樹立されていたということは、被葬者が女性であることを示唆していると考えられる。一方の人物埴輪一六は下げ美豆良の男性であるが（図3-2）、鍬を担ぐ人物埴輪一五と帽子の表現が共通し、大き

さもほぼ同一である点から、中心人物としては相応しくないと考えられる。甲塚古墳の埴輪配列は一列に配されているが、男女ともに横穴式石室からの位置で、グループ同士の対応関係があると思われる。中心人物の対応としては人物埴輪六と人物埴輪一六となる。また、人物埴輪七・八という機織り形埴輪（図5）、女性の中心人物の真横に配されていることは、女性の生業としての機織りを示しており、それが極めて重要な要素であることを人物埴輪配列から読み解くことができる。

以上のような想定が首肯されるものであるならば、被葬者の生前の姿として女性の人物埴輪六が造形されたと考えられなだろうか。古墳の被葬者に、少なくとも女性首長たちが葬られていることは間違いない（間壁一九八七、森二〇一五、清家二〇一〇・二〇一五など）。そのことは古墳時代を通じて、あるいはそれ以降の女性天皇の存在を考慮しても、了解されるところだろう。甲塚古墳の主要な埴輪列部分に女性像は九体、男性像は七体と、女性の優位性が感じられることも女性首長の墓であることを補強する。

### 三 古墳時代における女性首長の存在

古墳時代中期に登場した人物埴輪を中心とした場面は、

それまでであった動物埴輪や器財埴輪などと合流し、いくつかの場面を時間も空間も超えて表現された。形象埴輪群像の意味について諸説が存在することは前述の通りであり、筆者の見解は前述したが、いずれの説が正鵠を得ているのかは読者に判断を任せるほかない。ただし、人物埴輪のなかに被葬者が表現されているかどうかについては、生前の場面であれ、死後の場面であれ、必ず存在していると筆者は考えている。

古墳時代に少なくない女性首長墓の存在が知られて

いる。人骨が残っている場合もあるが、副葬品の在り方から男女が推定される場合もある。清家章は性別の分かる骨と副葬品の組み合わせを検討し、鍔・甲冑などは男性特

有のものであることを示すとともに、刀剣やわずかな槍は女性にも副葬される事例が一定程度あることを示した(図

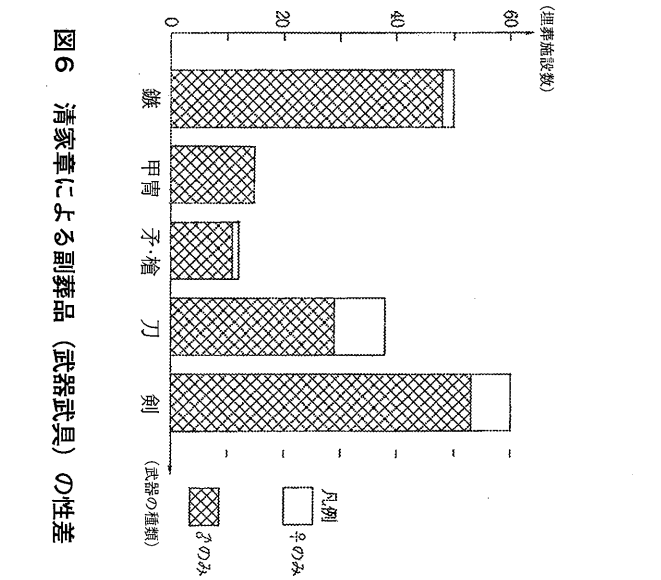
6 清家一〇一五)。装身具については、鍔形石が男性のものであることを改めて示し、女性特有の腕輪形石製品は

認識できないことを明らかにした。ただし、腕輪形石製品は腕に置く(配置される)場合に限り、女性特有の副葬方

法であると考えた。

清家は玉類に明確な性差を認識することは難しいとされ

たが、人物埴輪などにみられる耳玉の表現は女性に限られることから、実際の古墳においてそのような出土状況を示



す場合、女性と考えることができようである(森二〇一五)。手玉についても人物埴輪では女性に限られ、『万葉集』での使用例でもほぼ女性に限られるが、古墳の副葬品となつた場合には男性でも手玉の存在が確認できる。玉城一枝の死者における手玉に呪的な力を込めていたとする理解は、首肯されるものであろう(玉城一九九四)。足玉について

は女性特有の装身具である可能性があるものの、実際の出

土状況で女性人骨と足玉の存在が確認できた事例は少なく、人骨が残っていない場合には足結の玉飾りの可能性もある

(玉城一九九二・二〇〇八)。ただし、人物埴輪で双脚像が表された事例でみると、足玉の表現があるのは女性に限られる。近年確認された大阪府高槻市今城塚古墳の埴輪群像でも、足玉を表現しているのは女性のみである(森田二〇一一)。玉城が示した東国の事例に加え、大王墓の人物

埴輪群像で同様な習俗表現があることは、古墳時代の社会を考えたときに極めて重要な意味を持っている。すなわち、古墳時代において地域性を超えた性差(生物学的な性差と社会的・文化的性差との両方を含む)を示すものとして足玉があった可能性を指摘できるのではなからうか。

古墳時代前期の前方後円墳において鎌・甲冑が副葬される割合は、畿内では六七パーセント、全国的には五〇パーセントであるという。つまり、男性の割合が畿内では七割弱あるいはそれ以上、全国では五割以上ということになる。このことは、逆に女性首長の割合が三割から五割程度存在していたということに他ならないのである(清家前掲一

〇七一〇八頁)。古墳時代前期において、それほどまでに女性首長の存在が確認できるのであれば、古墳時代中期あるいは後期にかけても一定程度の女性首長あるいは女性が葬られた古墳があったはずである。

#### 四 人物埴輪における被葬者像と甲冑古墳の女性首長像

古墳時代には巨大な前方後円墳から小円墳まで、様々な規模と形をもった古墳が造られた。中には首長層とは思えない径一〇メートル以下の小円墳まで存在する。果たしてこれらの小円墳に葬られたのは、いかなる階層の人びとであったのか。

古墳時代研究において、この根本的な問いかけに明確な回答をした研究者はいない。おおむね前方後円墳の被葬者に対しては首長と考えることが多い。しかしながら、前方後円墳の製造が終了を迎える頃、常陸・下総・下野地域を中心に前方後円形小墳と呼ばれる小規模な前方後円墳が造られた。墳丘長が二〇メートル前後で、しばしば群在する在り方を呈している。これら前方後円形小墳の被葬者まで首長とすることは躊躇を憶えるのである(日高一〇一〇)。もちろん小円墳の被葬者についても、首長の範疇で理解することは難しいのではなからうか。

栃木県宇都宮市下桑島西原二号墳は、径二〇メートル程度の円墳であるが、形埴輪は馬曳き人物と飾り馬のみであった。筆者は、女性と考えられる馬曳き人物を被葬者であると考えており、馬匹生産に関わる家長的存在の女性であるととした(日高一〇一五 六一〜六四頁)。

まずは、人物埴輪群像の中から中心人物すなわち被葬者を探し出すことから始めなければならない。例えば、群馬県高崎市綿貫観音山古墳の胡坐し腰に鈴付き大帯を巻く男性、埼玉県行田市酒巻一四号墳の背が高く筒袖で冠と凹形浮文のある冠帯をつける男性、千葉県市原市山倉一号墳の頭巾状被り物を被る男性もしくは振り分け髪（群馬県太田市塚廻り三号墳の椅子に坐る男性、群馬県太田市塚廻り四号墳の振り分け髪で椅子に坐る男性、大府町高槻市今城塚古墳の埴輪列三区の中の二山式冠を被る男性などが中心人物（被葬者）として認識できるのではなからうか（百高二〇一五）。この他、群馬県高崎市保渡田八幡塚古墳シ1ソ1の中の冠を被り椅子に座る男性、同保渡田遺跡における冠を被り胡坐する男性、群馬県太田市世良田諏訪下三号墳の帽子を被る男性、同諏訪下三〇号墳の冠を被る男性、千葉県榑芝光町姫塚古墳の胡坐し両手を前に出す男性なども挙げられよう。

前述のように形象埴輪の意味について諸説が入り乱れているとはいえ、そこに表された具体的場面に就いて被葬者と全く無関係であるとする考えはなからう。筆者のように被葬者が中心人物として埴輪に表されていると考えるならば、そこに被葬者の性差が現出することはむしろ当然である。つまり、女性被葬者の姿を人物埴輪の中に見出せるは

すなわである。前述したように、これまでの発掘調査で発見されている人物埴輪群像では、中心人物がほぼ男性に限られる。しかし、下桑島西原二号墳では馬飼の女性が推定できることも前述の通りである。おそらく、我々が気づいていないだけであろう。改めて甲塚古墳の埴輪について見てみよう。

形象埴輪列は、横式石室に近い位置が総体的に上位の存在と考えられる。それは馬列、女性列、男性列すべてに共通した約束事であつたらしい。改めてその内容を記すと以下のようになる。まず、女性については、器や箱を頭に載せる人物一・二・三と両手を前に突き出す人物四、幅広の鉢巻をつけた人物五・六、機織をする人物七・八、上衣（四までは飲食などの捧げものをする人びと、中心像と思われる人物五・六の人びと、機織とその後ろで付き従う人物七・九の人びとである。このうち、人物六が最も大きなつくりである。飲食場と機織場面の間に中心人物が配されていると考えられる。男性については、上げ美豆良の人物一〇・一一・一二、鎌を担ぐ人物一三・一五、不明人物一四、下げ美豆良の人物一六である。人物一六以外は不明のものを除いてすべて

上げ美豆良である。上げ美豆良の人物一〇、一一の役割は未詳であるが、上げ美豆良で簡素な着衣表現をもつことから相対的に下位の人物であることは間違いない。続けて農具を担いだ人が三・一五および一四、そして中心人物一四は何かを握った右手を前に差し出している。これらをもとめると、上げ美豆良の詳細未詳の場面、農耕場面、そして中心人物ということになる。

機械場面と農耕場面は、生産の場面ということで対になるかもしれない。それぞれが男女の中心人物の横に配置されていることから関係があるといえよう。そして、飲食場面と中心人物(男女)がセットになると思われる。三体の上げ美豆良男性の存在が気になるところであるが、その意義はひとまず保留としておきたい。

次に馬であるが、石室から遠い場所から記述すると、馬四は遺存状況から馬三と同様に顔の右側にのみ手綱の表現がある片手綱の馬の可能性がある。馬三は片手綱馬であり、馬装は頭絡のみで、顔の右側から背中を通る片手綱が表現されている。馬二の馬装は頭絡(素環鏡板付轡)、胸繫(鈴付)、鞍、鏡(輪鏡)、障泥、尻繫(雲珠・円形突起)が伴った飾り馬である。馬一の馬装は頭絡(十字形鏡板付轡)、胸繫(馬鐸)、鞍、鏡(壺鏡)、障泥、尻繫(馬鐸)が伴ったフル装備の飾り馬である。特徴的なのが胴右側面に横坐

り用の短冊形水平板が装着されていることである。この中で最上位の馬装の馬は馬一であり、それが女性用であるということは、被葬者が女性であることを示すと思われる。以上のことから、人物埴輪六という一際大きく表現された女性像がこの古墳の被葬者であり、特に機械という生産を担うことが被葬者の生前活動にとって極めて重要なものだったのだろう。ことほどさように、形象埴輪に表された内容とは、被葬者のパーソナルな部分を表現していたといえるのではなからうか。類例のほとんどない動物埴輪などが出土する場合も、被葬者の生前活動と何らかの関わりがあるからこそ表現されたと考えられなだろうか。つまり、筆者の考える生前の神宴儀礼を中心とした場面を埴輪としてつくり、古墳に並べ、衆目を集めることを目的としていたのだろう。被葬者を最も特徴付ける要素を付加しつつ、共通する儀礼場面を表したのだろう。

### おわりに

ここまで、栃木県下野市甲塚古墳出土の形象埴輪をもとにして、その具体的内容とともに、被葬者像を推察してきた。これまでの諸研究には、中心人物への関心があまりにも無さすぎた。あるいは、女性首長の存在と人物埴輪群像についても検討されることがない。それは研究者たちが、

被葬者を男性首長であるはずと、何の根拠も無く漠然と考えていたに過ぎない。改めて検討する必要があることを明記し、ひとまず擲筆する。

## 引用文献

- 市毛 勳 一九八五「人物埴輪における隊と列の形成」『古代探叢Ⅱ』三五二～三六八頁、早稲田大学出版部。
- 梅沢重昭 一九九八「綿貫観音山古墳の埴輪祭祀」『綿貫観音山古墳Ⅰ』四五七～四七一頁、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 車崎正彦 一九九九「東国の埴輪」『はにわ人は語る』一三三～一七九頁、山川出版社。
- 後藤守一 一九三三「埴輪の意義を論じて古代の祭祀に及ぶ」『国史学』一四、一～一七頁。
- 後藤守一 一九三七「埴輪より見たる上古時代の葬礼」『斎藤先生古稀記念論文集（のち一九四二『日本古代文化研究』一五七～一七〇頁に再録）河出書房。』一九四四「埴輪論」『史迹と美術』一五十四、一〇五～一四頁。
- 小林行雄 一九六〇『埴輪』（陶器全集一）平凡社。
- 小林行雄 一九七四『埴輪』（陶磁大系三）平凡社。
- 下野市教育委員会 二〇一四『甲塚古墳―下野国分寺跡史

- 杉山晋作 一九八六「古代東国の埴輪群像」『歴博』一六、一五頁、国立歴史民俗博物館。
- 杉山晋作 一九九一「人物埴輪の背景」『古代史復元七古墳時代の工芸』講談社、四一～五六頁。
- 須藤 宏 一九九二「人物埴輪のもつ意味」『古代学研究』二六、二六～三頁。
- 清家 章 二〇一〇「古墳時代の埋葬原理と親族構造」大阪大学出版会。
- 清家 章 二〇一五「卑弥呼と女性首長」学生社。
- 高橋克壽 一九九六『埴輪の世紀』講談社。
- 滝口 宏 一九六三『はにわ』日本経済新聞社。
- 辰巳和弘 一九九〇『高殿の古代学』白水社。
- 辰巳和弘 一九九二『埴輪と絵画の古代学』白水社。
- 辰巳和弘 一九九六『黄泉の国』の考古学』講談社。
- 玉城一枝 一九九二「足玉考」『同志社大学考古学』一〇一頁。
- スズ ヴ 考古学と生活文化』二三五～二五〇頁、同志社大学考古学シリーズ刊行会。
- 玉城一枝 一九九四「手玉考」『橿原考古学研究所論集第十二』九三～一四頁、吉川弘文館。
- 玉城一枝 二〇〇八「藤ノ木古墳の被葬者と装身具の性差をめぐって」『考古学からみた古代の女性』七

- 一七三頁、大阪府立近つ飛鳥博物館。
- 塚田良道 二〇〇七『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣。
- 橋本博文 一九八〇『埴輪祭式論』塚廻り古墳群『三七  
 一六八頁、群馬県教育委員会。
- 橋本博文 一九九三『埴輪の語るもの』『はにわ』一七  
 二頁、群馬県立歴史博物館。
- 坂 靖 二〇〇〇『埴輪祭祀の姿容』『古代学研究』一  
 五〇、一七二―一三四頁。
- 日高 慎 二一〇〇『各地域における前方後円墳の終焉  
 茨城県』『前方後円墳の終焉』五八―七七頁、  
 雄山閣。
- 日高 慎 二〇一三a『公の芸術作品』だった人物埴輪  
 『週刊新発見日本の歴史 古墳時代2』三〇―  
 三三頁、朝日新聞出版。
- 日高 慎 二〇一三b『東国古墳時代埴輪生産組織の研  
 究』雄山閣。
- 日高 慎 二〇一四『甲塚古墳の埴輪配列について』『甲  
 塚古墳発掘調査報告』二一〇―二八頁、下  
 野市教育委員会。
- 日高 慎 二〇一五『東国古墳時代の文化と交流』雄山閣。  
 間壁霞子 一九八七『考古学から見た女性の仕事と文化』  
 『古代の日本』二 女性の力』一七―六六頁、
- 中央公論社。
- 増田美子 一九九六『人物埴輪の意味するもの』『学習院  
 女子短期大学紀要』三四、一―一七頁。
- 水野正好 一九七一『埴輪芸能論』『古代の日本』風土  
 と生活』二五五―二七八頁、角川書店。
- 水野正好 一九九〇『王権継承の考古学事始』『ドルメン』  
 四、四―二九頁。
- 森 浩 二〇一五『和泉黄金塚古墳と銅鏡』新泉社。  
 森田克行 二〇一一『よみがえる大王墓 今城塚古墳』新  
 泉社。
- 森田 悌 一九九五『埴輪の祭り』『風俗』二二、日本  
 風俗史学会、二―二頁。
- 若松良一 一九八六『形象埴輪群の配置復原について』『瓦  
 塚古墳』(埼玉古墳群発掘調査報告書四) 八三  
 ―八六頁、埼玉県教育委員会。
- 若松良一 一九九二『再生の祀りと人物埴輪』『東アジア  
 の古代文化』七二、二九―一五八頁。
- 和歌森太郎 一九五八『大化前代の喪葬制について』『古墳  
 とその時代』(二) 五五―八二頁、朝倉書店。
- 和田 萃 一九九三『古代の喪葬儀礼と埴輪群像』『はに  
 わ』秘められた古代の祭祀』二一―一四頁、  
 群馬県立歴史博物館。

